

本書は雑誌『POSSE』での連載を書籍化したものです。発端は2013年にディズニーの『アナと雪の女王』が公開された際に私がTwitterでその感想を述べ、それに目をつけた編集者から依頼があったというものです。近年はSNSを通じたこういった依頼が多いです。(というかほとんどがSNS経由の依頼かもしれません。)

河野真太郎 『戦う姫、働く少女』

(2017年、堀之内出版)

そのようなわけで、本書の出発点となるのは『アナと雪の女王』の分析です。この作品は、アナとエルサという女性のダブル主人公であり、とりわけエルサがさまざまなしからみから自分を解放させる「レット・イット・ゴー」という主題歌が、ある種のフェミニズム的な衝動を表現したのものとして評価されました。

後から考えると、この『アナ雪』が公開されたあたりから、ハリウッドのスターが主導した#MeToo運動という新たなフェミニズムの波が起こったのでした。この本を書籍化しているころには、編集者とはこれは書店で思想、批評、または社会学の棚に入るのかね、などと言っていて、本書がそのような波の中に乗って、もしくは飲みこまれていることには気づいていませんでした。

とはいえ本書は『アナ雪』とそのようなフェミニズムの波をそのまま肯定するものではありません。本書ではポストフェミニズムという概念を導入し、1980年代以降続いている新自由主義において、女性解放の理想であったはずのフェミニズムが篡奪されてしまっている側面に目を向けました。本書ではこのポストフェミニズムを新自由主義、そしてその生産様式としてのポストフォーディズムといったものと重ね合わせつつ、「解放」の物語が新たな資本主義へと飲み込まれていく様を記述しました。ポストフェミニズムをめぐる議論は、英語圏では2000年代以降にかなり盛んになされていますが、日本にはあまり導入されていませんでした。この本を出した後にその状況も少しずつ変わってきてはいますが、さらなる紹介が必要であろうと考え、色々と準備をしているところです。

『アナ雪』以外に扱った作品は宮崎駿監督や高畑勲監督のジブリ作品、細田守監督の『おおかみこどもの雨と雪』、『新世紀エヴァンゲリオン』といったポピュラーな日本のアニメーションにとどまらず、それらの作品と例えばカズオ・イシグロの作品やジョージ・エリオット、シャーロット・ブロンテといったイギリス文学の作品、また『インターステラー』といったSF映画、『逃げるは恥だが役に立つ』のような日本の漫画(とドラマ)などなど、(自分で言うのもなんですが)縦横無尽にさまざまなジャンルや文化を論じていきました。「解放」の物語が資本主義への取り込みを受けるというシニカルに聞こえるかもしれませんが、最終的に本書で析出したかったのは、ハイパー個人主義としての新自由主義を超える連帯の可能性でした。

現在、本書の続編と位置づけている、男性性論を準備中で、原稿は揃ったのでもうすぐお届けできるものと思います。どうぞお楽しみに。

(河野真太郎)

